一審判決を覆へし　鈴木医師無罪！
口腔治療注射事件公判
医学に挙る凱歌

16）明治時代から第二次世界大戦前までの男女別歯科医師数の推移について

日本歯科大学歯学部　岩上　智彦
丹羽　源男

近年，歯科医師数の過剰・地域差の問題や女性歯科医師数の推移状況を考えるにあたり，1884年（明治17年）～1941年（昭和16年）までの歯科医籍に登録された歯科医師を対象にし，男女別歯科医師数の推移を調査・分析することを，目的とした．

今回，参考とした資料・文献は，数値等が異なるものが多数ありましたので，国で発行しているものを最優先し，次に，歯科医師会等で発行しているものを参考にした．尚，昭和17年～昭和20年は，資料不足のため，省きました．

男女計歯科医師登録者は，1902年（明治35年）～1910年（明治43年）まで70名前後で推移し，それ以降は，歯科医学校の設立をうけ，1921年（大正10年）には，年度登録者約1,000人となり，およそ10年で14倍となった．男性歯科医師数は，1911年（大正元年）頃より，著しい増加で，女性歯科医師数は，1923年（大正12年）頃より，著しい増加が認められた．

人口1万対歯科医師数では，明治末で0.19人であったのに対し，昭和初期には，2.0人をこえ，約15年間に，10倍以上となり，その後も増加するもののゆるやかな増加で，大正時代に著しい増加が認められた．

人口1万対県別歯科医師数の分布では，大都市を中心にして，地方へ広がっていった傾向であった．特に，太平洋ベルト地帯と呼ぶような工業が発展した地域や，人口が多い地域に高い値が認められ，戦後は，人口が少なく，歯科大学がある地域に高い値が認められ，異なった分布傾向が示された．

戦前における女性歯科医師は，男性に比べると，非常に少なく，明治時代では，わずか13人しかおらず，1923年（大正12年）まで，男性歯科医師1人に対する女性歯科医師の割合として，ほぼ0.01人で推移し，それ以降の女性歯科医師の増加が著しく，1939年（昭和14年）には，0.086人となり，女性歯科医師が急速に増加していったことが認められました．このようなことから，戦前の女性歯科医師の推移は，現在における女性歯科医師の増加傾向を占う意味で，1つの有効な資料として，提供できるのではないかと推察されます．

17）明治および大正生まれの歯科医師の平均死亡年齢，死亡率および死因について

日本歯科大学　丹羽　源男

明治時代から今日まで，歯科医師の健康はライフスタイルや職業上のリスクにより影響を受けている．歯科医師が心疾患や呼吸器系による死亡割合が高いという報告もみられるが，種々の調査対象や比較から，一定の結論が得られていない．そこで，歯科医師の健康管理に役立てるための基礎資料を得る目的で，明治および大正生まれの歯科医師の平均死亡年齢，死亡率，死因について検討した．

調査資料の収集は，某歯科大学の校友会が保存している資料から行った．この校友会資料は全国卒業生による会員数が平成9年8月現在約10,000名を数える集団であり，校友の記録が長期にわたり詳細に保存されている．まず，明治生まれの者の死亡年齢は，27～101歳で平均75.0歳，大正生まれの死亡年齢は22～83歳の範囲で平均65.3歳であった．

次に死亡率であるが従来の報告は当該年度の歯科医師の死亡年齢から死亡率を出し，日本人生命表との比較がほとんどであるので，結果的に歯科医師の平均余命が日本人全体よりも短命傾向にあると結論づけられたものが多い．私は日本人の各年における人口動態統計より日本人男性の年齢層における死亡数から明治生まれ，大正生まれの歯科医師におけるそれらとの比較を試みた．その結果，いずれの調査年においても，歯科医師の人口10万対死亡率は日本人全体より低く，調査年の推移により，差が拡がる傾向が認められた．また，死因別では，いずれの調査年においても日本人全体に比べて，歯科医師の心疾患の死亡割合は高かった．また，大正生まれの歯科医師は明治生ま